

BADMAN REBORN - INK RED 2

written by HADEYA

1

ヤイバ取締法が強化されるそうさ。

そんな事になれば、この国はどうなる。ヤクザの大物———三島キラ美と彼女の上司〈ツカサ組長〉に牛耳られるだろう。この国は。

皆、ヤクザのレイプから愛する者を守る為、アイスピックを買った。報復が怖くて出刃包丁を買った。刃物———ヤイバが禁止されれば、ヤクザだけが武器を持つ事になる。そんな事になれば———

だからこそ、彼はコウヤ・ブリームから〈パール〉と呼ばれる鉄パイプを購入した。

たった一人、ヤクザに立ち向かう為に。独自の〈愛国心〉を貫く為に……。

2

「手応えは如何ですか、エース？」

〈木の葉〉が尋ねる。知る人ぞ知る、キングAI。パールを放りながら、エースは答えた。

「要るかよ、こんな物」

「……ですが、リボーンは？」

リボーン＝かつて勤務していたワイン・バー。オーナーはエースに未払いの給料がある。

エースが指先を動かした———半身麻痺からのリハビリ。そして告げた。

「もう俺はいつ植物人間になるか分からないから急ぐ必要がある。今日、リボーンに攻め込もう、木の葉」

「開店しているかどうか調べます」

エースはシャドーボクシングを始めた。闘争心を高めるべく。麻痺などに負けて溜まるか。俺を麻痺に陥らせた、バカ女……キラ美には屈しない。

絶対に。

3

夜。

エースが歩く——— 一之江のストリートを。木の葉と脳内会話を交わしながら。二人は恵比寿三丁目のバー、〈リボーン〉へ向かっている。

「はい……はい……全てイエスです、そのようにメラニン大統領にお伝え下さい、キラ美様」

通話を切った。溜息を吐き、高五佐仲首相はデスクで頭を抱えた。

高五首相は葛藤している。ヤイバ禁止法の施行を。正しい行いか否か反芻する。

「俺のデカマラでヒイヒイ言わせてやる！」

暴力団三代目山口組ツカサ組長は亭主の目の前で人妻をガンガン、レイプしている。純度100パーのシャブを人妻にキメながら。そのすぐ傍で亭主は殴る蹴るの暴行を受けている。賄賂を受け取った悪徳警官から。しかし彼等は知らない。亭主が秘密裏に出刃包丁を購入している事を。

人妻は喘ぎ、泣き叫んでいる。順番待ちの入れ墨組員が人妻の手足を抑え付けている。抑えながら笑っている。彼等は知らない。既に世間に粗悪CODEが出回っている事を。

彼等は知らない。自分たちがこの後、出刃包丁でメッタ斬りに遇う事を——

4

サム・ペキンパーの映画〈ワイルドバンチ〉に四人の主人公が歩くだけの場面があった。その場面は現場で即興演出された。演出内容を思い付かないペキンパー監督は主人公たちに〈ただ歩く事〉を命じたのだ。その場面は映画史におけるモニュメントとなり、〈伝説〉となった。

そして今、恵比寿三丁目を主人公が歩いている。エース……キリミハデヤと言う名の主人公が。しかし読者の皆様が伝説を見届けるのは、この後だ。この後、ハデヤは大暴れし、真の伝説となるのだ。ハデヤはスマートフォンを出すと店に電話連絡を入れた——宣戦布告を告げる為。

5

「6420円になります」

野薔薇乞助はレジを打った。店内は大忙し。オーナー兼バーテンダーである自分もレジ打ちを行う必要がある。

すいませ〜ん———付近のバーカウンターから呼ばれた。太い客の為、無下には出来ない。

「少々、お待ち下さい」

レジの客を無視して助乞は客の元へ向かった。その腕を左手が掴む。

「清算がまだ、だろうが」

乞助はハッとした。腕を掴んでいる客に見覚えがあったからだ。彼の名は確か……

「ハデヤだよ。キリミハデヤ。コースケ、派手に暴れようぜ」

「お、お前——」

紫色のダウンジャケットの右手首の裾からバールが伸びる。L字型の鉄パイプ……と言うより武器。

「派手にKILL YOU、派手にKILL ME(ニヤリ)」

バールの握られた右腕がスイングされた。ホームランバッターである〈大谷翔平〉もビックリする程、豪快なスイングが上から野薔薇乞助の脳天を射抜く。

同時に客が悲鳴を上げた。同時にボトル……ガラスの碎ける音が響いた。鉄製のチェアが背壁面の酒棚に直撃したからだ。

その音をイメージして、ご覧？

その場면을イメージしてみろよ。

その時の……野薔薇乞助の泣きっ面と言ったら——

俺は叫んだ。

「さっさと金を返すんだよ！クソッタレ！」

渾身のカでコースケの脇腹をコンバット・ブーツで蹴り上げてやった。

6

ツカサ組長がレイプする。人妻が泣き叫ぶ。泣き叫ぶ人妻を入れ墨組員が引っ叩く。

悪党警官はボコボコにしている。人妻の亭主を。笑い声と鳴き声、喘ぎ声が交錯する。

「イクぞ！中に出すぞ！俺の可愛いベイビーを産め！たくさん産め！産んだらレイプして壁に投げ付けて殺してやる！！！」

ツカサ組長の腰の動きが速くなる。それに呼応するかのように亭主の鼓動が高まる——妻を救う為に〈アレ〉を買った。

亭主の手がベッドの下に伸びる。その手は握っている。コウヤ・プリームで980円で購入した出刃包丁を。亭主が目の前のアキレス腱に斬り掛かった。

悲鳴が聴こえ、それに続く金切り声があらゆる音を切り裂いた。

7

アムネスティ・グローバルにSOSしよう——高五首相は深刻な人権問題を訴える意を決した。

椅子をブンブン振り回す。ブンブン、ブンブン振り回す。

「気付くのが遅えんだよ！」

ハデヤは鉄製のチェアを投げた。

「きゅ……救急車を——」

「うるせえ！ レイパー！」

コンバットブーツはコースケの後頭部を踏み付けた。派手に。ド派手に。

そこへパトカーが駆け付ける。完全武装の警官隊が店を囲む。

現場指揮を執る勝呂元博隊長は拡声器を手にした。

騒然となった店周辺。店だけが大人しい。ヤケに大人しい……。

勝呂隊長は告げた。

「警察だ！ 人質を解放しなさい！」

バリィン! という音がして鉄製のチェアが飛んで来た。勝呂隊長は突入を命じた。

一斉に警察が突入した。そして過ちに気付いた。厨房はガス臭い。そして——

「そういう事」

警官隊が振り向く。背後から熱油が掛けられた。高音に達した煮え滾る熱油を。

悶え苦しむのは日本警察の警官隊。そして、ジェットライターで引火するのは——

テックス——カルト皆殺し。

8

レッツ・ダンス！ 派手に、ド派手に。

厨房は火の海。燃え盛る炎の中からカチカチと音がする。ボールペンをノックする音が。

今夜の獲物は——

誰だと思えます？

「俺、さ。俺だよ、俺。テックスと言う名の最終兵器」

テックスが指を鳴らす。すると……豪華な店は業火に包まれ、真っ赤に染まった。

「燃～えろよ、燃えろ～よ～」

眩きながらパトカーに接近する。ボールペンを右手でカチカチしながらテックス、の表情は真剣そのもの、な訳。ってば壊れてる……壊れてるんだってば！

ブツ壊せ！ イカ臭い野郎共！！ キエエエエツ！！

9

悲鳴が聴こえる。街中で悲鳴が聴こえる。やがて炎が昇る。ファイヤーと言う赤いインク……INK REDが立ち昇る。

ハデヤの中期の代表作。お読みになられていらっしやらない方は是非、壊れたスマートフォンまで連絡を。

番号は——

「080！」

言いながら飛び掛かった。警官に。血走る眼、白い歯を剥き出しにして。

笑った。腹を抱えて笑った。

……笑いやがったら、ブチ殺すぞ。コックサッカー。バールをケツの穴にブチ込んで混ぜてやるからな。グルングルン、グルングルン掻き混ぜてやる。髪の毛を筆り、束にして引っこ抜くぞ、手前等！！

真摯すY¥¥淑女のみうなさま。本日のショーは

10

死——それは突然、訪れる。闇夜に暴漢魔が襲うよう唐突に訪れる。

勿論、その時も突然だ。

ツカサ組長は敢え無く逮捕。国内の人権団体が動いたのだ。

人権団体の名は〈blackclub〉。マイノリティで目的不明だが、彼等は突入した——関西の山口組事務所へ。組長を袋叩きにする彼等は救いの徒なのか破滅の徒か……。

一部始終を見届ける目。目、目、目。何もかも見据える目。リボーンの爆発と共に発生した小さな亀裂から〈目〉が見ている。その目は高速で移動し、停止する反復行為を繰り返している。世界終焉を眺めるように。

その目は〈誰の〉目か。一体、誰の目なのか。

ヒトミ——目はそう名乗った。

「だから、どうした？」

目が左右にバインドしながら横に移動する。超高速で。空中に開いた亀裂と亀裂の間から俺＝テックスを見ている。

「そこだ！」

ボールペンをブツ刺した——眼球野郎に。おぞましい悲鳴を上げながら鮮血を撒き散らす。

同時に見た。終焉の一部始終を。

この女が世界を壊す。俺が愛する世界……宇宙を。

だからこそ俺も壊す。貴様の世界を。確実に息の根を止める。約束する。お前を殺す。沼の底へ突き落とす。

涙を拭い、蹴落とした。ヒトミを。そこは雪国、北海道。

俺自身も落下し、飛び込んだ。気鋭の小説家として、孤高のレイバーとして。全身を回転させながらスクリーンを描き、沼を突き抜ける。

結果、辿り逸いたのは——

11

——死。

12

突然死。闇夜に暴漢魔が襲うよう唐突に訪れた。そこに連中はいた。飛び切りヤバい連中が。

イザベラ——またの名をメットガラ。彼女が率いる裏世界の中枢部。黒い衣服のメットガラが言った。魔導士の如き、ガラガラ声で。

「貴方が悪いの。何もかも全て。CODEの開発者であるハデヤ、貴方が責任を負うべきよ」

「ハデヤじゃない。俺の名は——」

秋留善行。人呼んで、人殺し。自分の世界を汚す奴は決して許さない。

「お前一人で何が出来る？ たった一人で」

メットガラの部下、魔導士の一人が言った。俯き、俺は答えた。細い声で呟くように。

「……昼と夜があるように光と闇が俺にはある。俺はコントラスト、さ。白と黒のシルエット。俺が白ならお前は黒。俺が紫なら、手前等のインクは——」

顔を上げた。そして告げた。

「レッド。鮮烈で強烈な、レッド」

言うなり飛び掛かった。持てる全ての力を駆使して。

……これで終わり、だ。第二巻の終わり。そして始まる新たなチャプター。第二章。

青い地球の青い海に戻り、人生を謳歌する。
その時、俺は光となり、闇となる。完全なる美となる。

ダイナミズム——それが答えだ。それが生き様。否定させるかよ……させて溜まるかってんだ。
活力が湧く。俺と言うイナズマが。俺は炸裂する。炸裂し炸裂し……

13

沼から飛び出た。突き抜けるように。凄まじい絶叫が夜の帳をザックリ引き裂きながら。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872